平岩弓枝

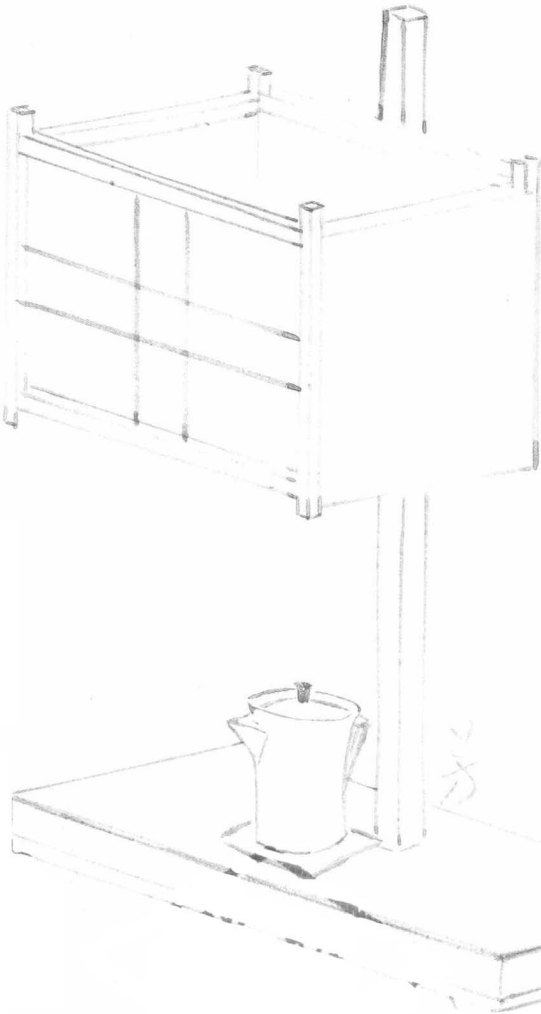
「かくれんぼ」

御宿かわせみ

平岩弓枝

かくれんぼ

御宿かわせみ



文藝春秋

かくれんぼ・御宿(おんやど)かわせみ

一九九四年七月一日　第一刷

(定価はカバーに表示してあります)

著者　平岩弓枝

発行者　阿部達児

発行所　株式会社　文藝春秋

東京都千代田区紀尾井町三―二三
電話代表(〇三)三二六五―一二一一

印刷所　凸版印刷

製本所　加藤製本

万一、落丁乱丁のあった場合は送料当社負担でお取替えいたします。小社営業部宛お送り下さい。

© Yumie Hiraiwa 1994

Printed in Japan

ISBN4-16-314860-4

目次

マンドラゴラ奇聞……5
花世の冒険……32
残月……68
かくれんぼ……106
薬研堀の猫……142
江戸の節分……174
福の湯……203
一ツ目弁財天の殺人……232

装画　佐多芳郎
AD　多田　進

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

かくれんぼ・御宿かわせみ

初出　「オール讀物」平成5年5月号〜6年3月号
（7〜9月号をのぞく）

マンドラゴラ奇聞

一

あと七日で端午の節句という日に、神林東吾はるいと二人で八丁堀の畝源三郎の屋敷へ行った。

源三郎の一人息子、源太郎に節句の祝い物を届けたいとるいがいったからだったが、ちょうど、五月人形の飾りつけが出来ていて、庭には鯉の吹き流しや、鍾馗の絵幟などが風にはためいている。

源太郎は素読の稽古から帰って来たところで、毎度のことだが、東吾にとびつかんばかりに喜んだ。

実をいうと、鯉のぼりをたてるために、東吾は五日ばかり前にも、ここへ来ている。

なにしろ、父親の源三郎は定廻りの旦那で、あけても暮れても、江戸の町を歩き廻っていて、帰宅するのは、いつでも源太郎がねむくなる時刻だから、彼をあてにしていると、まず、鯉のぼ

りは上げられない。
そのあたりを承知している東吾は、こういった時、必ずやって来ては、父親代りをつとめていた。
で、止むを得ないことだが、源太郎は実の父親よりも、東吾に対して子供らしい甘えをみせる。
実際、縁側に並んで腰をかけ、柏餅を食べながら、東吾に論語をそらんじてみせている源太郎は如何にも得意そうで、それを聞き、時折、つっかえそうになるのを補ってやっている東吾は、どうみても子煩悩な親父様であった。
「ここの家も、ぼつぼつ、源太郎の下が欲しいところだな。本所の宗太郎のところは、今度こそ男の子だと屋敷中が張り切っていたよ」
るいが見立てた源太郎の紋付を、まあ、なんといい色に染め上ってと眺めているお千絵に、東吾がいい、
「いえ、うちはもうようございます。なにしろ、腕白が二人いるようなものでございますもの」
と、お千絵が応じた。
「驚いたな、源さんは、まだお千絵さんの手がかかるのか」
「宅へ戻りますと、縦のものを横にも致しませんの」
「それは、おたがいさま」
るいが笑った。
「類は友を呼ぶとか申しますのでしょう。うちの旦那様も、よそでは随分とまめまめしいように

みえますでしょうけれど、我が家では相変らずの駄々っ子で……」
「本当に、まめでいらっしゃるのは、麻生家の宗太郎様ぐらいのものですのね」
女二人は屈託のない笑い声を上げ、東吾がむくれた。
「なにをいってやがる」
ひとしきり畝家が賑やかになったところで、東吾は久しぶりに兄の屋敷へ寄ることにし、るいは大川端へ帰った。
「かわせみ」は帳場のところに客がいた。
行商人風体で、かなり大きな風呂敷包を持っている。
るいの姿をみて、客と話していた嘉助が、さりげなく立って来た。
「お帰りなさいまし」
といってから、小さく、
「神奈川のほうから参ったお客なのでございますが、今からですと帰って帰れない時刻ではないが、この節、ぶっそうなのでひと晩、泊めてもらえないかと申しまして……」
ということは、今朝早くむこうを出て来て、江戸で用事をすませ、日帰りをしようかと考えていたが、夜旅になるのを避けて一泊したいというものだと、るいは判断した。
「空いている部屋はあるのでしょう」
「それは、ございますが……」
「では、適当に……」

ちょうどお吉が、
「みて下さいまし。さっき、長助親分が筍を届けてくれましてね」
といいに来たので、るいはそのまま台所へ行った。
そのあとで、嘉助がちょっとためらってから、結局、女中に声をかけて、客を梅の間へ案内させたのは、なんとなく、長年の経験でひっかかるものを、その客に感じたからであった。
が、このところ、「かわせみ」も客の数が落ちていた。
世の中が不穏になって来て、たいした用事もないのに江戸見物にやって来るような客はなくなったし、不景気風がだんだん強くなって、商用の人々の足が重くなったせいでもある。
嘉助が持参した宿帳に、梅の間の客は、
神奈川在、横浜屋弥助
と、かなり達筆で書いた。
「失礼でございますが、横浜屋さんとおっしゃいますと、異人館のほうで御商売をなすっていらっしゃるので……」
嘉助が訊いてみたのは、この節、神奈川の横浜に、お上が長崎や箱館と同じく港を開いて、そこに外国からの船が入り、生糸などの取引が盛んに行われているという評判を耳にしていたからであったが、客はそれに対して曖昧な返事しかしなかった。
うさん臭いというほどでもなかったが、嘉助は用心して、その夜は何度となく客間の廊下を見廻ったが、別になんということもなく、翌朝、横浜屋弥助は朝飯をすませると勘定をして「かわ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

せみ」を出立して行った。
そして二日、麻生宗太郎がいつもより、せかせかした様子で「かわせみ」へやって来た。
「まさかとは思うのですが、ここ数日の中、横浜から来たという男を泊めてはいませんか。中肉中背で肩幅が広く、顔はやや浅黒かったといいますが……」
折よく東吾も帰って来ていて、早速、嘉助が宿帳を持って来た。
「ひょっとすると、このお方ではございませんか」
嘉助が開いてみせたのは、横浜屋弥助のところで、
「このお方でございましたら、一昨日、二十八日の夕方におみえになりまして、ひと晩、お宿をして居ります」
と答えた。
「その男は、大きな荷物、わたしがきいたところでは葛籠だったらしいが、紺色の風呂敷に包んだのを持っていたと思うが……」
「おっしゃる通りでございます。たしかに、そのような荷物をお持ちでございました」
二人のやりとりを聞いていた東吾が口をはさんだ。
「何者なんだ、そいつは。まさか、かわせみが盗っ人を泊めちまったんじゃあるまいな」
「盗っ人ではありませんが……多分、横浜屋弥助というのは、でたらめですよ」
嘉助の顔色が変ったので、宗太郎は慌ててつけ足した。
「そいつを泊めたからといって、別にお上のおとがめを受けるというのじゃありません。わたし

の想像では、おそらく、横浜へ来る外国の船から荷揚げされたものを適当にくすねて売り歩いているのではないかと思うのですが……」
「それじゃあ、盗っ人じゃないか」
「推量だけでは、決められませんよ」
「それが、宗太郎と、なんの関係があるんだ」
「問題なのは、そいつの持っていた荷物でしてね。手前の父の弟子で、神田で開業をしている坂井広庵と申す者の所に、昨日、その男がやって来て、横浜の異人から入手したという薬物の類を売りに来たそうです」
坂井広庵は漢方の医者で、その男の持っていた品物をみたが、どれもあまり見たことのないものばかりで、結局、何も買わなかった。
「たまたま、今日、父の屋敷で広庵と会い、その話を聞いたのですが、どうも蘭方で使う薬種のようなのでして……」
長崎で蘭方を学んで来た宗太郎にしてみれば、大いに関心があった。
「どうも気になるので、心当りの医者を何軒か訊いてみますと、やはり同じ男と思えるのが、立ち廻っていました」
それらの医者が口を揃えていうには、その男の持っている品が、薬種とはいっても、今まで見たこともない、名前も知らないようなものばかりで、どういう病気に用いるのか、どんな効力があるのか、さっぱりわからないので、興味はあったが、誰も入手しなかった。

一つには、薬価が異様なほど高かったせいでもあったらしい。
「つまり、宗さんはそいつを探し出して、薬を買おうというわけか」
東吾がいい、宗太郎が半分、肯定した。
「それもありますが、気になることがあるのです」
広庵の話によると、その男の持っていたものの中に、人参に似た根があったという。
「最初、広庵はてっきり韓の人参かと思い、求めようとしてよく調べてみると、似てはいるがそうではない。おそらくは偽物と判断したと申すのです」
漢方でいうところの人参は主として朝鮮の産で、体の衰えを防ぎ、力をつける効能があり、万病に効く貴重な薬とされている。
「東吾さんは人参というものをみたことがないでしょうが、薬用に使われるのは、根の部分なのですよ」
根をよく干して、けずって煎じるのが一般的な用法だといった。
「その根の形なのですが、ちょうど人間の下半身のような恰好に二股に分れていましてね、人参という名もそこから来たといいます」
つまり、人間の下半身に形が似ていればいるほど、効力も大きいとされて、
「精力を高めるのに薬効があるともいうのですよ」
笑いもしないでいった。
「よせやい。俺に人参の講釈をしたって、はじまらねえや」

「人参は、まあ万能薬のようなものですが、これに似た形をしていて、下手をすると命とりになる植物があるのです」
「なんだと……」
「わたしは、一度、長崎でみたことがあるのですが、ペルシャのもっと南のほうに生えているらしい。名はキルカエアとかマンドラゴラと申すようで、黄色い小さな実が成るそうですが、それを食べると睡気をもよおす。また、その根の皮を、ぶどうの酒に浸したのを飲むと更に深い眠りにおちて、体を切ったりしても痛みを感じることがない。それで、蘭方では、体を切開する手術の時に、これを用いて、患者の痛みをやわらげるのに役立てます」
東吾と嘉助が思わず顔を見合せた。
宗太郎が、こんなふうに雄弁になるのは珍しいことでもある。
「そりゃあ、医者にとっては便利な薬じゃないか」
「その通りなのですが、使い方を間違えるととんだことになる。例えば、これに似た薬草で莨菪というのが早くから漢方にあるのですが、これは下手に使うと、とんでもないことになると書かれています」
明の時代に悪僧が張柱という者の女房に横恋慕し、食べ物の中に莨菪を混ぜて勧めると張の一家はみな、眠ってしまったので、悪僧はやすやすと、張柱の妻を犯し、その上、張柱の耳にその粉薬を吹き込むと、張は気がおかしくなって一家を惨殺してしまったということが漢方の書物に出ていると、宗太郎は話した。

「そりゃあ薬ではなくて、毒じゃないか」
流石に、東吾が眉をひそめた。
「人をねむらせるというようなものは本来は毒です。しかし、毒も使い方によっては薬にもなるのでして……もし、広庵のみた人参のようなものが、そのマンドラゴラだとすると……」
漸く、東吾は宗太郎のいわんとしていることを理解した。
「そいつを人参と間違えて使うと、とんでもないことになるというわけか」
「そうです。なんとか、その男をみつけ出して、実物をみたいと思って探しているのです」
横浜から出て来たというからには、江戸のどこかに泊っている筈だし、実際、「かわせみ」にも一泊している。
「わかった。早速、源さんに話して、宿屋改めをしてもらうことにしよう」
だが、東吾が源三郎に、宗太郎の話を伝えた翌朝、金杉橋の近くで、胸を一突きにされた男の死体がみつかった。
たまたま、近所に住む大工が、前夜、その男が金杉通り二丁目にある居酒屋で、伴れらしいのと激しくいい争っていたのを傍で飲んでいて目撃していた。
「なんでも、横浜から来たような話で、品物をどこへやったとか、代金を一人占めするつもりだろうなぞと申して居りまして……」
あまり声が大きくなったので、店の者が注目すると、二人は急に黙り込み、金を払ってそそくさと出て行ったと、大工は町役人に申し立てた。

町役人が居酒屋の主人を呼んで聞いてみると、大工のいう通りで、二人の中の一人はどうも言葉がぎこちなかった。ひょっとすると唐人ではないかという。

横浜から来たというのが、畝源三郎の耳に入って、念のため「かわせみ」から嘉助が出かけて首実検をすると、間違いなく、「かわせみ」へ泊った横浜屋弥助だとわかった。

弥助と唐人らしい男が居酒屋を出て行ったのが四ツ（午後十時頃）を過ぎていたこと、弥助の死体が、夜半から降り出した雨にぐっしょり濡れていたことから考えて、弥助が殺されたのは、居酒屋を出て間もなく、従って下手人は伴れの唐人らしい男である公算が強くなった。

もう一つ、源三郎の報告を聞いて、東吾と麻生宗太郎が考え込んだのは、弥助が「かわせみ」へ来た時に持っていた、大風呂敷包が、死体のどこにもなかった点で、居酒屋の主人や大工の証言によっても、どうやら弥助は居酒屋へ来た時、すでにその荷物を持っていなかったと思われた。

「相手の男が品物をどこへやったと訊いていることからしても、弥助は、すでにそれらをどこかへ売ったと判断してよいでしょう」

唐人らしい男は弥助の仲間で、品物の売り上げの分配をめぐって争いになり、弥助を殺したのではないかと、源三郎はみている。

「どうも、この節、横浜へ入る異国船の商売物をかすめ取って売りさばいている仲間がいるようで、奉行所から近く係の同心が横浜へ出張って参るそうです」

と聞いて、宗太郎は出来ることなら、その役人に同行させてもらえないかと源三郎に頼んだ。

「どうも、弥助の持っていた薬物が気になるのです」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.